

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

The world depends on me and changees .

【作者名】

火藍

【あらすじ】

俺次第で、世界は変わる

ISインフィニット・ストラトスへの二時創作

オリ主人公である彰は、男である

「女子だらけの学校に行くことになったwwwwwwどつやら男は俺ともう一人www」というスレを作り、安価で何をするか求めたところ、条件を4つだされた。

- 一つ。「ハーレムを作らない」
- 一つ。「ハーレムを作らせない」
- 一つ。「童貞のまま、誰ともつき合わず卒業する」

「一つ。「誰にも好感が持てる男でいる」

ハーレムとは

ハーレム

それは一人の男に対し、数多くの女が恋愛対象として対置されていることを表す。

この男、ハーレムが嫌い……というワケではない。

だが、ネットで「女子だらけの学校に行くことになったwwwwwwどうやら男は俺ともう一人wwww」とスレを作成したところ、

安価でどうするか決めることになり。

- 1「ハーレムを作らない」
 - 2「ハーレムを作らせない」
 - 3「童貞のまま、誰ともつき合わず卒業する」
 - 4「誰にも好感が持てる男でいる」
- という4つの条件を出された

ある、春の日。

彼は学校へ行った

IS学園——彼が通うことになった学校だ。

世間が「ISを動かせる唯一の男」として織斑一夏のことを報道していた立春だったが。

彼もまた、ISを動かせるのだった

祖国のロシアの隠蔽により隠され、「女」としてこの学園へ行くことになっていた。

しかし、12月頃からめきめきと身長が伸び180cm、明らかに女として行くことは不可能となり、

ロシアはやむを得ず、男物の制服を準備し、彼を通わせた、ということだ

勿論「ド忘れ」で学園の方には連絡を入れていない

女として通え、と言われたとき、彼は「3年間女装か……目覚めそ

うだな」といい、

身長が伸びたときは「随分大きい女の子になってしまったわ」

男で通っていいと言われたときは「あら？じゃあこの喋り方はやめた方がいいのかしら」

学園に伝えてないことがわかったときは「俺が怒られるのね」

と随分楽天的に考えていた

ゆつたりと歩いて登校する。織斑一夏と同じ制服の上に黒いパーカーを着て。

教室に入る。どうやらゆっくりきすぎたようで、入学式は終わっていた。

自分の名前が書いてある席に座り、フードをとり、軽くウェーブした白髪を露わにする

そして……机に突っ伏し、寝始めた

「……らさん！彰さん！」

「……ウース」

一夏という「唯一」「ISが動かせる男に集中していたクラスの女子は揃って「えっ!？」という声をあげ、その低い声を出した人間の方を向いた

「お、おと……!？」

と、扉が開き、黒髪の女……教師、か。が入ってきて、きよろきよろと誰かを探す

「いた……お前だな？男で、ISが使えるっていうもっ一人」

立ち上がってニコリと笑う

「彰・シルルスキーです。よろしく」

自分が出せる精一杯の美声で言い放った

「…いやそうじゃなくて…」

「ん？ああ、男です」

「…連絡遅いんだが」

「我が祖国はそんなもんっすよ。むしろギリギリセーフ？」

「ふざけるな」

その先生の手から出席簿が投げられる。

教卓から一番後ろの席まで一瞬。

身体を捻ってかわす、とチヨークが飛んでくる

後ろに反り返り、間髪を容れず、そのままバク転し対峙する

その間に「千冬ねえとあんなにやりあうなんて…!?」という声が出た

ピクリと教師の眉が上へ上がったのを見て、警戒を解く

「ロシア代表候補生です。仲良くしてくださいなっ、と」

一礼し、席に戻る

啞然としている、眼鏡おっぱ…山田先生を促す

「っ…はい！じゃあ次」

自己紹介が終わり、休憩時間になった。

ここからが彰の戦場だ。

誰よりもはやく席を立ち、誰よりもはやく一夏の席に行く

「イチカ、だったよな。俺は彰・シルルスキー。彰でいいぜ。よろしく」

笑顔でそっぴいながら握手を求める

これで悪印象持つヤツがいるだろうか。

リアルの人間に対する行動は、ギャルゲーと、乙ゲーで培った矛盾しているだろうが何とかなっているのだから問題ない。

ちなみに、彰は日本人の母とロシア人の父をもつハーフだ。

一応、ロシア国籍だ。

「おう…よろしくな、彰。男がいてくれて助かったよ！」

「はは、俺も安心した。こんな可愛い女子の中で3年間も我慢できるワケないからな」

条件4 誰にも好感反感を持てる男でいる。反感を持たれないようさりげなく褒める

此方の会話を盗み聞きしているだろうから、このようなことで大丈夫だろう

「…ちょっといいか」

「え？ 篝？」

一夏を廊下へ連れ出す女。

ポニーテールのキリッとした冬の朝の空気を思い出すような篝、というらしい。

幼なじみ、か。よくあるヤツか…とこっさり会話を聞いていた彰は思う

(イチカ、かなり朴念仁だぞ…よくあるハーレム物の鈍感主人公かよ…)

決闘がお好きなようで

授業が始まる。俺の席は最後尾なので悠々と寝る
どこか遠くで一夏が叫んでいるのが聞こえたが、無視する
授業中にハーレムつくるとかないよな……そう思いながら。

「ちょっと、よろしくって?」

「へ?」

「んあ?」

気づいたときには授業が終わっていて、彰を起こしにきていた一夏と、声の大きさのせいで起きた彰が素っ頓狂な声を出した。

顔を起こし、声をかけてきた人を見上げる

金髪ゆるふわロール碧眼。いかにも、な感じの女。

「訊いてます?お返事は?」

「あ、ああ。訊いてるけど……どついつう用件だ?」

二人で会話を始めたので、睡眠を再開しようと顔を下げる

「ちょっと……あなたもですよ……わたくしに話しかけられているのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないですか?」

うるせえなこの金髪お嬢様。喉まででかかったが食い止める

なんせ俺には条件4が重くのしかかっているから。

「ああ、じゅめん。キミの名前は?」

「わたくしを知らない?このセシリア・オルコットを?イギリスの代表候補生にこそ」

「ありがとう、セシリアさん」

「~~~~ッ!!」

顔を真っ赤にして怒っているようだったが、知らない。

人の話を延々と聞き続けることがあまり得意ではない彰の手段だった。

自分が知りたいところを相手が言ったところでお礼を言い、話を切る

「あ、質問いいか？代表候補生って、何？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの!？」

「イチカ、代表候補生っていうのは平たくいえば国の代表の操縦者、いるだろ？その候補の人だ。俺もだけどな」

「ふむふむ・・・さんきゅーな、彰！」

エリート、ということらしいが、俺の場合男で操縦できる＝珍しい。だからだろっ。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・幸運なのよ」

「そりゃラッキーだね、セシリアさん。でも・・・ISを操縦できる

『男』が一人もいるクラスにいることも、幸運だと思わない？」

「ッ！・・・それー」

チャイムが鳴る。いいタイミングだと思う。グッジョブチャイム

教卓には黒髪おっぱ・・・織斑先生が立っている。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する・・・ああ、その前にクラス対抗戦にでる代表者を決めないとな」

クラス代表者とはそのままの意味だ。学級委員長、のような立場らしい。

面倒だろつな、頑張っしてほしい

「はいっ。織斑くんを推薦します!」

ほぼつ、イチカカ。面倒ごとをやるのは大変だろつな、とつとつとしながら考える

「私はシルルスキーくんがいいと思います!」

「ほかにいないか? 自他薦問わないぞ……いないな。では多数決しよう」

「お、俺!」

「織村、席に着け、邪魔だ。どちらかに手をあげろよ」

突然甲高い声が遮った

「待つてください! 納得がいきませんわ! そのような選出は認められません! 大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ! わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか! 物珍しいからという理由で男にされては困ります! わたくしはこのような島国でんー!」

ギヤーギヤーとわめくセシリアに後ろから近づき、口を手で塞ぐ

耳元で、小声で囁く

「周りを見て。日本人も沢山いるから、冷静に」

「ちよ、離して下さいッ! 文化も後進的な国で暮らさなくてはいけない」と自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛でー」

「すこし静かにしろよ、英国のお嬢サマ」

「世界一まずい料理で何年覇者かわかんねえイギリスが」

一夏が言うてはならない事を言ってしまった

「なっ……!?!」

「あー、ほらイチカ…イギリスは自覚無いんだから言うなよそんなこと…」

「わ、わたくしの祖国を侮辱しますの!?!決闘ですわ!」

「イチカ任せた」

「え、いや俺喧嘩苦手だし」

「この場合ISで戦うんじゃないの？」

「俺ISあんまのつたことない。彰専用機？持ちじゃねえの？」

「いや確かにそうだけど…ちょっとお嬢サマ相手にはねえ…」

「俺だつてやだよ！なんかプライド高そうだし！」

「ははっ、イチカ。この会話クラス中に聞こえてること忘れてない？」

「あ」

一夏が固まる。その視線の先には顔を真っ赤にし激昂しているセシリアがいる

「お二人とも勝負ですわ！二人ともわたくしに負けたら奴隷にしますわー!」

「侮るなよ。「それは面倒だからイヤだなあ」「え？」

「いやだつて負けるでしょ？奴隷とか言ってるじゃん。ごめんなさいセシリアさん。俺が悪かった」

その場で頭を下げる

「今頃謝つたつて遅いですわ」

「嘘……だろ……」

膝をつき、両手を床に揃えておく

所謂土下座のポーズだ。

「これで許して下さい」

「彰さん……あなた専用機持ちでしょうっ？」

「女性に手をあげることはできない」

「でもあなたはわたくしを、わたくしの祖国を侮辱しましたわ。ダメです決闘です！」

「さて、じゃあ勝負は一週間後。放課後第3アリーナで行う。では授業を始める」

ぱん、と織斑先生が手を叩き、話を締める

箒師範、彰教師

彰は一夏にISのことを教えていた場所は寮の一室

元々彰は女とされていたので、女子と二人部屋だったが、事実的に男二人となった。

珍しい、というか奇跡のような男が二人もいるならば、一緒に監視した方がよい、という理由で、

彰と一夏は相部屋となったわけだ。

飯は終え、シャワーを交代で使い、今は部屋着な状態だ。

相手が入っている間に荷物を片づけたので、部屋はこざっぱりとしている。

ベッドの間においた机に、一夏のノートと教科書を広げ、彰は自分の教科書を手に持つ

「ISは、宇宙で作業するために作られたんだよ。宇宙服がないと息ができないだろ？宇宙服の代わりにエネルギーのシールドがある。んで、操縦者が死んだら元も子もないから、生かすために色々される。わかる？」

「おうー何となくはー！」

「取りあえず俺は奴隷になんてなりたくないから頑張るから、イチカも頑張れ。続けるぞ。ISは相棒だ。パートナーだ。彼女より大事なものだ。乗るだけ仲良くなれる、そう思っとけ」

「彰…ありがとうー！」

この夜、彰によるIS講座は消灯後も続けられた

朝8時。食堂で飯を食べる

和食セットを一夏と彰は食べている

半分は日本人なので、白米は好きだし、納豆に嫌悪感はない

…というかむしろ好き。大好き。

食しながら、正面に座っている一夏の右隣…此方から見ても一夏の左に座っている女に話しかける

「篤さん…だったよな？よろしく。黒髪美人。大和撫子」

「そ、そういうこと言うのはやめろ！あと、篤で、いい。彰」

談笑していると、女子が数人来る

「ここいいかなっ？」

「ああ、いい…：よな？篤、イチカ」

「別にいいけど」「問題ない」

安堵らしき溜息、ガッツポーズ、周囲のざわめき。

「声かけておけばよかった…」

「まだ大丈夫」

何が大丈夫なのかは彰にはわからない。

わかっていることは、その大丈夫が自分には一生わからない、ということだけだ。

「うわあ、二人とも結構食べるんだね！」

「夜少なめにするタイプだから、朝沢山取らないときつくてな」

「ああ、そっか。ロシアじゃないんだっただ」

ぼそりと呟くと、一夏が何でだ？と言うように見てきたので続ける

「朝食食べるだけ食って身体を暖めとかなないと死ぬからな。冬なんか特

に」

「大変だな、ロシアって」

「正直住みにくそうだよな」

「まあ、そういう祖国が大好きなんだが。日本も好きだけど」

織斑先生がきて、手を叩く

「食事は迅速に効率よく取れ！」

急いで食器を片づけ、授業に向かう

女子だらけにも慣れ、間を縫うようにして歩く

授業が終わり、休憩時間

「織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。専用機を用意するそうだ」

「??？」

一夏がクエスチョンマークを浮かべてると、彰が助け船を出した

「コアを作る技術は一人しか知らないんだ。467機すべてのコアは一人の博士が作ったもの。一夏の場合、実験体：…みたいなものかな。まあそのお陰で専用機：自分だけの機体が確保できるから安いもんだろっ」

「そうか…」

この後、篠ノ之博士と篠ノ之筭との関係のことで一悶着あったが、割愛する

「安心しましたわ。一人初心者相手ではフェアじゃありませんものね」

腰に手を当て…おしりふりふり。皆おいでよワンツダーランツ

「ぶはっ!!」

彰の小声での呟きが聞こえたようで、爆笑する一夏。

「ああ、セシリアさんも専用機持ちだったもんね」

「そう…だったな…くくっ…」

「なあ彰。一夏は何故爆笑しているのだ？」

篤がきて問う

「俺にはよくわからないよ、篤」

「お前のせいだろっ！あーもー!!」

「ごめんごめん。さて、よくわかっていない一夏に説明な。世界の人口は60億を突破しました。その中の467人のうちの一人がセシリアさんだ」

「なるほど」

「やーて、ご飯にしようか篤」

とりあえず、今現在、一夏のハーレムの影響にありそうなのは篤だ。二人をくつつけないようにしなくちゃな。

そう考えて、廊下へ出る彰達の後ろから、セシリアがキーキーと喚んでいたが、誰も聞いていなかった

「はい、篤、一夏。日替わりね」
「サンキョ」

食券を渡し、並ぶ

鯖の塩焼きと聞いて、篤はどことなくうれしそうだ。

「ねえ、キミ、そうそう黒髪のキミ。噂の子でしょ？代表候補生と勝負するんでしょ？」

「はあ」

3年生らしい女子生徒が、定食を受け取るうとしていた一夏に話しかけている

「この展開は……」

「私がISについて教えてあげよっか？」

「はい、ぜー」

「「必要ないです」」

彰と篤が遮る。

ハーレム妨害は忙しい。

「とうかなんで俺には誰もこないんだ……？と悲しい疑問を持ちつつ。」

「ISについては俺が責任持って教えてますし、俺も勝負しますね」

「私は身体面でサポートしています」

「二人で一夏のこととはやっていますんで、気遣いありがとうございます」

「そ、そう。それなら仕方ないわね」

彰と篤の剣幕におされたのか、先輩は退散していく

ハーレムさせるわけにはいかない。

食事が遅い一夏の隣で、食べ終わった二人は一夏のトレーニングについて相談していた

「授業おわって、晩飯まで4時間あるだろ？んで飯終わって消灯まで4時間」

「放課後3時間ほどは鍛え直したい」

「了解。じゃあ等着替える時間もいるから、放課後すぐ1時間はISについて俺が教える。んで稽古、シャワーを浴びて貰って飯。あと4時間は？」

「夕食後は動きにくいから必要ないぞ」

「じゃあ一夏のために……3時間、勉強だな。とりあえず一夏の専用機が届くまでは」

こっつして地獄の数日が動き出した

スパアーンツ！と気持ちいいぐらいの音が道場に響く

「一本。イチカ頑張れよ……」

審判は彰。だが、彼の目は二人の試合を見てはいなかった

床に座り、教科書を見ている

ノートにわかりやすくまとめている

「いつてて……もう一回ッ！」

「正直お前がそんなに弱くなっているとは思わなかった」

「帰宅部三年連続皆勤賞をなめるなよ」

「情けない。ISではなく剣道で男が負けるなど……悔しくないのか？一夏！」

「そりゃ、まあ……格好悪いと思うけど」
「格好？格好をきにすー」

チャイムが鳴る。チャイムは役に立ちます
教科書などをまとめ、立ち上がり二人のそばへ行く彰

「さ、飯食いにいっつ」

そしてセシリアとの対決の日、前日

「なあ、篤、彰」

「なんだ、一夏」

「なに？」

一夏が重要なことをポツリという

「俺のISは？」

「……………」

そう、前日になってもまだ届かない、一夏の専用機
基礎はたたき込んだ。しかし肝心のものがない限り、それは無駄に
思える

今は第3訓練場にきている

「ま、まあ届くんじゃないのか？」

「とりあえず、俺ので説明していく」

黒と白のチェックのチョーカーを意識し、呼ぶ

(おいで、マトリヨシカ)

キーン、と小さい音がして、薄い膜のような物が展開される
それは集結し、ISとなる

マトリヨシカ。勝手につけた名前だが、あっている気がする

機体の色は黒を基調に作られている

戦い方としては・・・耐えて、耐えて、耐え抜いて真実の力がでる
壁。

他のISとは比べようもないほど、機体は頑丈だ。

分厚い盾を6枚、装備している

背面に4つ、両手の甲に1つずつある

背面のものは浮遊していて、それぞれが自由に動いているように見える

そして彰の手には二本の中剣が握られている

「ふいー・・・これが俺の相棒こいびとのマトリヨシカだ。んで・・・これがエネ
ルギーバリアー。こっちが・・・」

説明は訓練場が閉鎖されるまで続いた

一夏VSセシリア

「織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

次の日、一夏のISが届かないまま、セシリアとの約束の時間になり、第3アリーナ、Aピットに駆け込んで一夏の名前を呼ぶ山田先生

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。すっは、すっは」

「はい、そこで止めて」

「っっ」

みるみるうちに顔が赤くなっている。

「……」

「……ぶはあっ！ま、まだですかあ？」

「イチカ……ちょっと今のはないわ……」

「そ、そ、それですすね！きました！織斑くんの専用IS！」

「織斑、すぐに準備をしる。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番でものにしる」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせる。一夏」

「イチカがセシリアさんと戦った後、俺がやるから勝ってね。いや勝て。俺は戦いたくない」

一夏が戸惑っているところにたたみかける織斑先生、箒、彰

「……早く……」

「っっん」と音がして、ピット搬入口が開く

「これが…」

「はい！織斑くんの専用IS『白式』ですー！」

それは真っ白だった。彰のIS、マトリョシカとは正反対に。

「体を動かさせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ」

一夏はISに触れ、あれ？と声を上げる。

電撃のような感覚はない。ただ、馴染む

これが彰の言っていた、彼女より大事ということか、と一夏は思う

「背中を預けるように。座る感じでいい。後はシステムがする」

「あ」

「ハイパーセンサーは問題ないな。一夏、気分は悪くないか？」

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

後、筈に行ってくる、と伝え、一夏はピット・ゲートへ進む

「あら、逃げずに来…一夏さん!?普通彰さんでは…?」

「俺が勝つから戦わずにすんでラッキー、だそつだ」

「そんなこといってねえ」「…」とピットの中から彰の声がする

一言、二言、三言会話していたかと思うと、突然セシリアさんが射撃体制にはいる。

そして撃つ

白式の左肩装甲が吹き飛ぶ。

…：そうか、普通の装甲は脆かった

白式がグルングルン回る。

一夏の様子が知りたく、目の部分だけISを展開する

マトリヨシカの形はかなり特殊だ。

盾が4枚自動で動くことも特殊だが、なにより他の機体と違うのはその姿形にある

普通はない顔の部分に、眼鏡のようなセンサーがついている
視覚情報をより鮮明にするためだ。

それに加えて、何重にもなった装甲。

搭乗者の身体が見えるところは、殆どない。

だからこそ、盾として、壁として存在している

しかし、その特殊な装甲のせいで、今まで乗り、操れたものはいない。彰以外に

男がISにのれる。それも今まで誰も操ることができなかった機体に。

すぐさま国は隠蔽し、戦闘にも出させなかった

それ故、対人戦が苦手な盾という奇妙な構図が出来上がったわけだ

「…：イチカ、勝ってくれ」

そう呟いた彰の視線の先には中破した白式が映っている

白式はブルー・ティアーズに刀が届く距離までつめていた

勝った、と思ったその刹那、白式と一夏は白い爆発と光に包まれた

と・・・煙が散ったその先で、白式はより洗練された、純白の機体へと変化していた

一夏が武器を取り出す

雪片ー・・・じゃない。雪片よりも、より美しい

俺の憧れた、雪片が、蘇った？

ピピッと眼鏡センサーが反応する

『雪片弐型』

その雪片は弐型だった

はぁ、と溜息をつく。あのISには、美しい雪片には会えないのか。

一夏がセシリアさんに突撃する

一夏が雪片弐型で逆袈裟払いを放つーー直前にブザーが鳴り響いた

『試合終了。勝者ーセシリア・オルコット』

「武器の特性を考えて使え、大馬鹿者」

「・・・はい」

一夏が千冬に怒られている横で、山田先生が彰に話しかける

「えっと、今はセシリアさんが休憩中です！彰さん、準備はいいですか

「？」

「……………」

「彰さん？」

「ふあいつ!? 腹減ってないっす!」

「えっ」

「え？」

　　箒が溜息をつき、教える

「今セシリアが休憩している。休憩が終わったら戦闘だが、準備はいいか？」

「え、あつ、ああ！準備できてないので帰ります」

「ふざけるな」

　　千冬が後ろから叩く

　　スパンと気持ちいい音が響く

「いやだって対人とか無理っす」

「ISなしで私の攻撃を避けたのに、か？」

「いやほんと…………ガチで…………」

『セシリア・オルコットVS彰・シルルスキー　準備してください』

　　放送がかかると、彰はより一層ガタガタとふるえ出す

「あ、あああ……………」

「ほら行け!」

　　箒に押されるようにして、ピット・ゲート前に行く

（くそっ!…………マトリョシカ、行くぞ）

半ばやけになりながら、相棒（こいびと）の名を呼ぶ
キーン、と微かな音がし、ISが展開される

「これは……こんな機体、見たことないぞ」

千冬がつぶやくが、彰には聞こえていない。否、聞こえてはいるの
だが、理解できていない

何故なら彼の頭の中は恐怖でいっぱい……と言っわけではなく、
敵のブルー・ティアーズの情報で埋め尽くされていたからだ
2m超のレーザーライフル、スターライトMK。
フィン状のパーツはBトレーザーの銃口がついている
その名はブルー・ティアーズ。

ブルー・ティアーズはそのフィン状のパーツ4機だけでなく、ス
カート状になっているパーツもだ。

こちらはミサイル。2機ある。ブルー・ティアーズは計6機

(…よう)

だいたい理解した、と言っように首をふる
と、ピット・ゲートが開く

「此方は黒いんですのね」

「…」

「ちょっと、聞いてますの？」

腰に手を当てて言い放ったが、返事がなかったので少し大声で言う

「あっ!?なんだっ!?!」

「・・・もしかして、ビビってますの？」

「ハッ！んなワケねえだろ。眠かったただけだ」

思わず素の口調で答えてしまっ

で
セシリアは違和感を感じ、首を傾げる、がまあいいか、という感じ

スターライトMK にエネルギーを装填する

「ちっさと終わらせましょー」

「俺もそうしたいー」

耳をつんざくような音がし、マトリョシカに閃光が走る

「俺もそうしたい！・・・って、どういう・・・？」

「はやく帰って納豆が食いたいんだよー」

もつもつとあがる煙の中から元気そうな声がする

煙が消えると、そこには腕をクロスさせ、盾で身を防御した姿勢の
マトリョシカがいた

装甲に傷は・・・なかった

彰VSセシリア

「なっ!？」

セシリアの驚愕も理解できる

通常のISなら、装甲が吹き飛ぶであろう

通常の搭乗者なら、避けようとするだろう

そう、通常なら。

しかしセシリアの対戦相手は最強の壁であり盾。

そして彰。

セシリアには彰の情報も、マトリヨシカの情報も、殆どない

故に、驚いた

しかしソレは、その会場にいたすべての人間もだった

「うー…：やっぱこえーな…」

「なん…：で…：!？」

「何でってなにが？」

「何故このわたくしのブルー・ティアーズの、スターライトの攻撃を受けておきながら無傷なんですか!？」

「それはな…：教えてやんねえ」

「えっ」

地表すれすれにいる彰を空中から見下ろしているセシリアが素っ頓狂な声をだす

すると彰はにっこり笑って言い放った

「なんで今戦ってる相手に教える必要あんの？お互い代表候補生なワ

ケでISに乗りまくってんだからさあ。終わったらちよつと教えてあげてもいい」

思いつきり素でいる彰に誰も気がつかないほど、完璧な笑顔だった

「・・・では！倒すまでですっ！」

セシリアは再度スターライトにエネルギーを装填し、打ち放つ

最初は若干の手加減をしていたが、今度は本気だ

その証拠に、彰周辺の地面が抉れ、土煙がたつ

「まだまだ・・・なんじゃないのか？」

「なっ!?それでは！」

平然と立っている彰に向けて、ブルー・ティアーズ・・・以下ビットが飛んでくる

あらゆる方向からレーザーを放つ

しかし・・・

「残念でした」

すべて、両手の甲にある盾と、4枚の盾で防がれた

歯噛みし悔しがるセシリアをみて、彰は盾を消す

「なにをしているんです・・・」

「いや、だってさあ・・・時間かかるじゃん」

「同情ですか!?!」

「そうじゃないんだ。こうした方がセシリアさんにとって不利になる」

意味が分からなかった。

装備をはずして、セシリアが不利になる……？

意味が分からなかったので、セシリアはレーザーを放つ

装甲に直撃し、外れる

が……

「な、んですの……それ……」

「じゃーん。マトリョシカ第二」

右肩の装甲が外れただけなのに、煙が散ると、黒の装甲すべてが外れていた

しかし、その下にオレンジ色の装甲があった

「俺が『マトリョシカ』って呼んでる理由は教えてあげるよ。攻撃を直接装甲に受けると、すべて外れる。けど、その下にも装甲はある。開けても開けても出てくるマトリョシカのように。そして……装甲が一段階外れる毎に、マトリョシカは軽くなる」

地面近くにいたのは戦略、とかではなく、ただ単にそれ以上浮かべなかったからだ、とぼやく彰

まあ、と続ける

「軽くなったからね。さっさと終わらせよう」

目にも止まらぬ速さで、両手に構えていた中剣一本を投げる

ブルー・ティアーズの左肩にあたり、エネルギーシールドが削れる

「くっ……」

「よそ見してる場合じゃないんじゃない？」

一度左肩を見たセシリアが視線を戻すと、また黒になったマトリョシカがすぐ目の前に来ていた

一瞬の間に、残った中剣で自分の装甲を削ったのだ。だからもう一段階外れる

「マトリョシカ第三には、特殊装備があります」

いきなりですます調で言った彰の左手には短刀のようなものが握られていた

ソレを、ブルー・ティアーズの搭乗者の首もとに突き立てる

絶対防御が必ず働く位置だった

シールドエネルギーがギャリギャリと削られていくのがわかったセシリアが身体から力を抜き、放送を待った

『試合終了。勝者ー彰・シルルスキー』

シャワーを浴びながら、セシリアは考えた

(今日の試合……)

何故、一夏のシールドエネルギーがゼロになったのかが分からない
そして……彰。彼のことが分からない

(わたくしは勝って、負けた……)

両親のことを考える

もう死んでしまった二人のことを。

そして……

彰のことを

散々、セシリアの国を侮辱しつつも、決闘、と言ったら即謝り、さらに上下座をして許しを乞うた、あの男のことを。

熱いのにかく、切ないのに嬉しい

何なのだ、この気持ちは。

知りたい。あの機体の……いや、搭乗者の。彰のことを。

頬を赤く染めたセシリアがシャワールームからでるのは、まだ先のことだった

翌日の朝のSHR。

「では一組代表は彰さんで決定です…!」

山田先生は嬉々として喋り、女子も大いに盛り上がっている。

一夏も篤と話している

「先生。質問いっすか」

「はい、彰さん。どつぞ」

「なんで俺？」

「それはわたくしが推薦したからですわ!」

セシリアが立ち上がり、腰に手を当てる

何故か上機嫌だ

「彰の方が実戦慣れしていないんですもの。クラス代表になれば実戦には事欠きませんもの」

「やあセシリアわかってるね！」

「そうだよねー。別に一夏くんでもよかったけどねー」

「じゃあイチカにしよう。そうしよう」

するとクラス内の雰囲気ですこし暗くなる

「いや一夏くんは…」

「ちよつと、ねえ…」

「負けたし…」

「かっこつけときながら…」

一夏の評価はかなり下がったらしい。

「いやでも！俺よりセシリアの方が強いーあ、」

「せせせセシリアなんて！呼び捨てなんて!!」

「ごめん、セシリアさん」

た
ついつい、呼び捨てにしてしまい、急いで謝ると、赤い顔で睨ま

「呼び捨てでお願いします…」

「えっ……はい」

と、いきなり後ろから背中を叩かれた

「痛ッ！」

「座れ」

「うす…」

「クラス代表は彰・シルルスキー。異存はないな」

「いや、あの……セシリア、さん……?」

「セシリアでいいですわ。なにか?」

「ちよっと……近すぎでは……ないでしょうか……」

「ふふっ 気のせいです」

いや、どう考えても近い。何故廊下を歩くときにこんな密着するのだろうか

人通りの少ない廊下で。

今は一夏のトレーニングのために第三訓練場へ向かっているわけだが……

一夏とはぐれた

そして俺の隣にはセシリア。

もしかして、まだ奴隷を諦めていなかった……とか?

などというおふざけはここでやめておく

俺の勘違いでなければ、セシリアは俺のことが好きになったらしい。勘違いであってほしいが。

しかし条件が存在するので誰とも付き合わない……というか、セシリアとは付き合わないだろうな。条件がなくても

俺、ツインテールが好き……

「ねえ！本校舎一階総合事務受付ってどこにあるか知らない?」

訂正。俺は大してツインテールは好きではない

話しかけてきたのは、ツインテールの少女。

「それならわたくしたちの行く先にありますわ。一緒に行きましょう」

「ありがとー！あたし、凰鈴音。鈴って呼んでいいわよー！」
「俺は彰・シルルスキー。よろしく、鈴」
「セシリア・オルコットですわ……って、あなた中国の代表候補生では？」

きょとん、と首を傾げた後、頷く鈴

「そうよ。セシリアは、イギリスだったかしら？……といつかなん
で男?!」
「えっ!?!……ああ、そうか」

隠蔽されていたんだった。忘れていた。

「俺もIS乗れるんだ。ロシア代表候補生でもあるぞ」
「へえ……すごいよね」

歩きながら話していると、鈴目的の場所へ着いた

「あれが一階総合事務受付ですわ」
「ありがとー。あんなたちって、何組？」
「二人とも一組だが？」
「彰はクラス代表ですよ」
「そ、ありがと じゃねー」

寮へ戻り、飯を食べ終わると、クラッカーが乱射される

「クラス代表おめでとー!!」

「…」

「はいはい！新聞部です！話題の男子二人にインタビューしにき

ましたあ！」

おーっと盛り上がる女子

盛り上がりすぎだと思う。絶対

「私は黛薫子。 副部長やってます。 ではずばり！女子に囲まれて、
べっぴん。」

ボイスレコーダーを一夏に向ける黛副部長。

「え、あつと……あれですね、はい」

「あれってなに！あれって！」

「あれはあれじゃないですか、なあ。 ……彰パス！」

「ここで一夏くんもう一人の男子に丸投げだ！彰くんはどこかな？」

皆がきよろきよろとあたりを見回すと、片づけをしていた食堂のお
ばちゃん（パート）のところにいた

「おばちゃん、今日もお疲れ」

「あら、彰くんありがとう」

「おいしかったよ」

一同啞然

「あ、彰くん、ちょっといいかな？」

「？はい、いいですよ」

歩いて黛副部長のところに歩く彰

「何かご用ですか？」

「あ、あのおばちゃんとはべっぴんじい……」

「いえ、特になにも。感謝は思ったときに伝えるべきと考えているんで」

「そ、そうなんだーでは質問です！女子に囲まれて、どうっ？」

ボイスレコーダーを向けられ、少し悩む彰

ちなみにこの悩みはどう答えたら素晴らしい返事かを考えていた

「えっと……やはり緊張しますね。時々シャワーを浴びた後、自販機に行くんですけど、そのとき女子とすれ違わないかドキドキで。女子の風呂上がりって色っぽくないですか。だから」

「ほっほっ……聞いてた？一夏くんー」

「はいー彰かつーいー」

彰のそばに一夏がくる

「お、ツーショットいいね……っていつか彰くんできかいね」

「180ぐらいですよ」

「ほほっ……写真撮らせてもらっても？」

「ぜひね」

黨副部長が少し離れてカメラを構える

「ピースで笑顔いい？……そうそう、いいよー。はい、チーズ」

カシャリ。

「もう一枚！肩組んで！」

カシャリ。

「抱きついて」

「何ですかッ!？」

「一夏がツッコミを入れたが、彰はというと……」

「えー、黛さん、こんな公衆の面前では恥ずかしいですよ」

「お、わかつてるねえ彰くん!」

「あ、ああ彰あー!？」

「冗談」

「さて、と呟きつつ周囲を見渡す黛副部長

「お目当ての人を見つけると名前を呼ぶ

「セシリアちゃんセシリアちゃん」

「はい!何ですか?」

「三人で写真いいかな?」

「どうぞー」

「セシリアを中央に引き寄せる

「彰くん気がきくねえ」

「カシャリ。」

「こうして、織斑一夏専用機おめでとう&彰くんクラス代表就任パーティーは十時過ぎまで行われた

鈴は明るい元気な子

「織斑くん、彰くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

朝、彰が自分の席に着き、一夏がその横の壁にすぎると、クラスメイトが話しかけてきた

「転校生？今の時期に？」

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

「え」

彰は昨夜あった女の子を思い出す

明らかにあいつだよな……と

「どんなやつなんだろうな、彰」

「あ、ああ。元気そうなツインテールだぞ」

「えっ……知ってんのか？」

「昨日会った」

ふむ、と一夏は納得する

「というか女子気にしてる場合じゃないわ、俺」

「ああ……来月だっけ、クラス対抗戦」

「ほんと、これから忙しい」

「まあ何かあったら言えよな。手伝っからさ」

ありがとう、といい笑いかける

此方も一夏がそばにいとありがたい。それだけでハーレム妨害が楽になるから

「夏を見失うとすぐに囲まれてるからな！」

「彰くんがんばってね！」

「デザートのためにも！」

「専用機もちのクラス代表って1組と4組だけだから余裕でしょ！」

「その情報、古いよ」

入り口から声が聞こえた。

「二組も専用機もちがクラス代表になったのよ。優勝なんてさせないから」

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音」

「なに格好付けてんだ？似合わんぞ」

と、鈴の後ろから出席簿が火をあげる

「SHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん」

「織斑先生、だ」

「す、すみません」

一二組に向かって猛ダッシュする鈴

一夏が何事が眩き、周囲の女子が群がる

午前中の授業で、分からないところだらけで死にかけている一夏を引きずり、学食へ向かう

最近のお決まりだ

「イチカ、なに食べる？」

「日替わり」

「だよな」

券売機で日替わりを2枚買い、おばちゃんに渡す

「今日はなに？」

「鯖の塩焼きよ」。彰くん好きだったわよね？」

「ああ、大好き。いただきます」

一夏を引きずっているせいで片手しか使えないが、器用に片手で二つのトレーを持ち、移動する

セシリアは洋食ランチ、箸はきつねうどんを買ってついてきた

「あ、ここいいか……って鈴？」

「あら彰じゃない。いいわよーって……一夏!?!?どうしたの!?!?」

「授業でお疲れなんだよ。ほら座れ」

「おー……彰さんきゅう」

席に着き、ががつと飯を食い始める一夏を横目に、手を合わせて食べ始める彰

「んー、うまい」

「彰、こちらのパスタも美味しいですわ」

「そう?もらってもいいか？」

「はいぜひどうぞ」

鈴が箸を片手にわなわな震える

「あんたらなんでそんな仲いいのよ？」

「え？」

「そんな恋人みたいなんて照れますわ」

「誰もそんなこといってないよ、セシリア」

クラスメイトが突っ込むと、しょんぼりするセシリア

「鈴？どうした？」

「うっさいわねっ！バカ一夏！」

鈴がどんっ、と音を立てて立ち上がる。そのまま颯爽と去……ら
なかった

「今日放課後開けときなさいよ」

「あいにくだが、一夏は私とISの特訓をするのだ」

「そう？じゃあ終わってから」

「終わったら一夏は彰に勉強を教えてもらっている」

「あたしが教えるからいいわよ」

「いや、俺も復習になって助かってるからいいよ」

絶対こいつ一夏のこと好きだろ……と思い、妨害開始する彰

「じゃあ勉強終わったら行くから。あけといてね」

そついつて片づけに行ってしまった。

ちよつと強引キャラつらい……

「え？」

第三訓練場へ行くと、箒がIS打鉄を装着、展開していた

「近接格闘戦の訓練もしておこうと思ってな」

確かに、中距離戦闘型であるセシリアのブルー・ティアーズ、近距離防御型の彰のマトリョシカでは、近距離戦闘はできない

今の一夏では彰の堅い装甲は破れない

「今日は一夏と私で模擬戦をしようと思う」

「では彰、わたくしたちはこちらでやりましょう」

少し離れたところで打ち合う彰とセシリアを横目に、刀同士で鏝迫り合いをする一夏と等

その特訓は、日が暮れるまで続いた

ピットへ戻り、IS展開を解除する

「ほら、イチカ……だいじょぶか？」

「ああ……だいじょぶはない」

タオルとスポーツドリンクを手渡すと、椅子に座り込む一夏
その横で、ISスーツの上半身を脱ぎ、身体を拭く彰

……と

「一夏っ！」

パシュッとスライドドアが開き、鈴が現れる

「お疲れ。はい、たお……なんでもな……ッ!？」

「入るときはノックぐらいしよつぜ」
「ん？どうかした？鈴」
「な、なんで…脱いでんの!？」
「いや暑かったし…?」
「シャワールーム行きなさいよッ!」

顔を真っ赤にし叫ぶ鈴に、彰は冷静に返す

「あら、あなた男の俺を女子のシャワールームに行かせるわけなのね」
「?」
「ぐっ…喋り方気持ち悪い」
「あ、彰ー、俺もうちよいこにいるからシャワー先いいぞ」
「それはありがたい、けど。同じところに行くんだからまだ残るよ」
「…:どづいづ…:こと…:ですか…:」

鈴の許容範囲外だったらしく、敬語になる鈴

「どづいづって…:わかってんじゃないのか?」

一夏がまた地雷を踏む。

「いつもはシャワーはイチカが先なんだけどな」
「いつも!?ちよつと、も…:ッ!?!一夏、どづいづ」と!？」
「どづいづって、なにが?」
「…:…:…:別にやましい関係じゃないからな」

そつ言つと、あからさまにほつとする鈴

「同じ部屋なんだ」
「そつなんだ…:よかつた…:」
「何がよかつたなんだ?」

すぐにピットから飛び出していった鈴を見送りながら、
一夏は首を傾げていた

鈴ちゃんは強引です

「というわけだから部屋代わって」

「……………え？」

寮の部屋、時刻は八時過ぎ。夕食が終わり、エネルギー回復した一夏がお茶をいれてくれて一服していると、いきなり部屋に鈴がやってきた。

彰は意味が分からず、クエスチョンマークを浮かべていた

「いやあ、あたしが代わってあげるって言うってんだから、代わるのが男の筋じゃないの？」

「……………なんだその自己中心的な考え」

「別にいいじゃない。あたし男と同室だろうと全然平気だし。幼なじみだし」

「俺はどうするんだ？」

「あんたは女とでも構わないでしょ？」

「いや全然無理」

「まあなんとかなるわよ。早く代わって」

会話が……………成り立たない……………ッ！彰は強引キャラが苦手である

「ごり押しされるとどうしても流されてしまうのだ。

最近のびてきて、頭にケモ耳が生えたようになってしまった髪を触りつつ悩む

(こいつだめだ……………絶対イチカのこと大好きだ……………)

「鈴。それ荷物全部か？」

「そうだよ。あたしはポストンバッグひつつあればどこにも行けるからね」

しかももう準備している……だと……!?
本当に強引キャラはきつい……しかし絶対にハーレムだけは阻止しなければ。

「俺たち、学校側から同じ部屋にいるよう言われてるんだけど?」

「じゃあ3人で? ちょっと狭いわね」

「……あ、イチカ。今日の授業のおさらいしようか」

もう諦めた。無視するのが一番じゃないのか。そう思い一夏にまったく別の話をする

「あたしを、無視するのね?」

突然鈴の右腕が光り、鈴のIS、甲龍の装甲をつけ、彰に殴りかかる

「……ッ……何? 危ないよ?」

しかし彰も左腕を部分展開し、防御していた

何事もなかったかのように話しかけてくる彰に驚愕する鈴

鈴の中では今の一撃はISで防がれると分かっていたながらの攻撃だった

しかし、本人に多少のダメージは入る計算だった

だが……その肝心の本人がけろりとしている。

驚きを隠せなかった

「………んで……」

「何?」

「一夏……」
「……」

「ええとー」

言おうとした一夏の口を手で押さえ、鈴をみながらにっこり笑う

「内緒。^{ライバル}敵に言う必要なんかないね・・・リンリンちゃん」

「あああ!?! 彰だめだってそれはー」

鈴に視線を戻そうとしたが、戻らなかった

何故なら、もういなくなっていたからだ。

「……………復習と予習、どっちがいい?」

「復習で……………」

しっかりと勉強し、眠りについた

翌日、生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙があった。

表題は『クラス対抗戦日程表』。一回戦の相手は二組ー鈴だった

5月。ちょこちょこ鈴には遭遇するが、無視されるか睨まれるかのどちらかだ。

「彰、来週からクラス対抗戦ですわ。こころは試合用に設定されるので、特訓は今日で最後になります」

茜色に変わりゆく空の下で、真っ黒のE.Sを身に纏う彰

さらに伸びて、後ろ髪を長く一つ結びし始め、はねてケモ耳のようになっている頭と相まって猫のようだ。

そんな白髪が漆黒の機体の中にある。

顔も真っ白で……………

「おい？ 彰、大丈夫か？」

「……」

「彰？ どうかしたのか？」

「あつ!? なんだ？ 猫じゃないぞ？」

一夏、セシリア、筈は溜息をつく。かなり緊張している。来週なのに。

「いや髪型的に猫っぽいぞ」

「切る」

「それは駄目ですわー!」

「なんで」

「それは……何でもですー!」

「にょにょ」と何かを言っているセシリアを放置し、一夏に話しかける

「今日は一夏にお願いしていいかな」

「おうー! いいぞ」

一夏のISには雪片式型しか装備が存在しない通常のISには専用装備がある。

ブルー・ティアーズにはブルー・ティアーズが、という風になんとして後付装備としてスターライトMK、近接ナイフをつけている

彰のマトリョシカの場合、専用武器は両手の平の甲につけている盾が専用装備だ。

名前は「ピロシキ」にしようとしていたが、国に猛反対されたので名前はまだない。

後付装備は背後の盾4枚と、二本の中剣。
実をいうと、あと一つ後付装備が存在する。

名前は……ピリエーチ。守護。

コレを装備するとより重く、より頑丈になる。

ISにもかかわらず、地面にめり込んでしまつほど、
なので使わない。使えない

「む……イチカ、剣に迷いがなくなってきたな」

「そう……か？全然わからんな」

「雪片なら……こんな初期装備ぶち壊せるんだろつな……」

遠い昔に記憶を馳せる

家からでられなくなるような、そんな雪の日。

TVにも、白銀が映った

静かに佇むソレは、側は無機物でありながら、人間のような温もり

と……鋭さが見えた

まだ幼かった彰はソレに目を見張った

あんなに美しいモノはみたことがなかった

しかし、そのような感情は誰にも理解されなかった

彼が美しいと思い、熱愛し、崇めるまでにもなったソレは、ISで
はなく雪片の方だった

皆はISのことを褒め称えた。その中に雪片は含まれていなかった

「おい……ッ」

「夏の叫び声により、意識は強制的に現実へ戻された

」

「それはこっちが聞きたいんだが……大丈夫か？」

あたりを見渡す……と、自分が寝っ転がっていることに気づく。

マトリョシカの展開も解除されている

「ん？何があった？」

「いきなり上空でIS展開解除するから焦った。地面すれすれのところで、なんかすごい大きい盾みたいなもんが背中にできてたんだけど、なに？」

無意識下でIS解除、自動展開？聞いたことがない

しかしそのビリエーチは今はない。

考えれることはただ一つ

(マトリョシカ、ごめんね。浮気じゃないよ)

マトリョシカが拗ねた、か。

恋人のように扱い続けたせいかな、彰のISは優しく接するとその日は調子がよくなる。

名前を呼んだりすると、よりだ。

「ああ心配してくれてありがと、イチカ」

「いやいいよ。お互い様、だろ？」

彰VS鈴

試合当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは彰と鈴。噂となっている新入生、さらに専用機持ちの戦いとあって全席満席、さらに通路も埋まっていた。どうでもよいことではあるが、通路が塞がっていたらもしもの時困るよね。

会場に運良く座れた一夏は膝に肘をついて溜息をつく。視線の先には、向かい合って……いや、正確には彰の機体は重みのせいで浮かべず地面にいるのだが……静かに佇んでいる鈴と甲龍、それに冷や汗ダラダラで顔面蒼白の彰とマトリヨシカ。開始時間が近づくと共に会場は静かになっていった。それと同時に彰の顔から表情が一切消え、甲龍を見つめているだけになった。

(非固定浮遊部位……面倒だ。衝撃砲龍砲……それに搭乗者の身体能力はかなり高い)

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

ふわりと浮き上がり移動する鈴に対し、ゆっくり歩くように地面を動かす彰

観客からは疑問の声が上がっていた。あきらかに盾である後ろの浮遊部位や、両手の甲。そして全身を覆うような形をしたIS……

そして規定の位置についた瞬間、顔も殆ど装甲におおわれた。見えているのはほんの数力所だけだ。

5mほどの距離になった彰と鈴は開放回線で言葉を交わす

「なんかすごいISね……見たことないわ。あっ！そつだ。賭しよ？」

「いやだなあ」

「あたしが勝ったら、あたしは一夏と同室ね」

「俺が勝ったら……？」

「そんなの……」

両刃青竜刀を発現させ、構える

「あるわけないでしょ？」

「さあ、ね」

「ISの絶対防御も完璧じゃないんだから、ヤバくなったら降参しなれよ」

「……俺の、マトリョシカのシールドエネルギーを突破するほどの攻撃力をお持ちで？」

「まあそつじつと」

『それでは両者、試合を開始してください』

ピーッと鳴り響くブザー、ソレが切れた瞬間、鈴は動いた
ガッツ!!

瞬時に彰に接近、両刃の青竜刀を袈裟懸けに切り抜いた、と思った

「ふー……ちょっとフライングじゃなかった？」

平然と右手の盾で防ぐ彰

しかし流石は中国代表候補生、驚きを押し固め、そのまま二撃、三撃と続けざまに切り込む

盾で応戦し、すべてを弾き返す

だが……、ぱかりと鈴の肩のアーマーがスライドして開く

中心の球体が光ると同時に、盾に衝撃が走った

「今のはジャブ、だからね」

にやり不適な笑みを浮かべる鈴。

ジャブの次は……ストレート、だ。

瞬時に丸まり、背後の盾二枚を前に回し、両腕と合わせて4枚の盾で防ぐ

束ねた髪の毛がぐるんと跳ねると、彰は、彰の機体は砂埃に紛れて見えなくなった

「……………」

異様に巻き上がり続ける砂埃。それは彰の特殊装甲の盾が二枚地面を削るようにぐるぐると回っているせいだった

明らかに強い。砲身が見えないのでよりきつい。

常に盾でガードし続ける、という方法もあるが、それはそれで面倒だった

長引けば長引くほど、盾は傷ついていく。こちらの盾がすべて壊れるか、相手のエネルギーがなくなるかの賭となる。

負けたら、一夏はハーレムの段階を進めるだろう。それだけは阻止しなければならぬ

ビリエーチを使うか。いや、今後誰と戦うかも分からない中、最終装備を簡単に見せるわけにはいかない

かといって盾を外してマトリョシカを軽くするのも……

普段の戦い方と違うモノを出したらすぐに情報は知れ渡る

「ああもつっ！なんで収まんないのよー！」

仕方ない。なるべく新情報を出さないようにして……
盾の回転をやめ、砂埃が収まるまで待つ

「……あなた防御力すごいのね」

「俺が、じゃない。こいつがマトリョシカすごいんだ。どうだすごいだろうー！」

「これ見よがしに自慢をすると、鈴は鬱陶しいとばかりに腕を振る

「まああたしには適わないでしょうけどね」

「さあ、どつだろつね。マトリョシカは俺の恋人だから、頑張ってくれよ」

だから、俺も頑張らなくちゃ、ね。そう呟き、手に持っていた中剣で装甲をスツと攻撃する

黒の装甲がはがれ落ち、光の粒となって消えていく。

その光が消えると同時に見えたマトリョシカは、オレンジ色だった先ほどまでのマトリョシカはどちらかというところ一昔前のロボットのような、

ほとんど全身に分厚い装甲がついていた

が、今のマトリョシカは要所要所を護れるようにつくられた軽装備である

しかし先程までの装甲と同じようにかなりの防御力を誇る

「……すごいのね」

「褒めてもなにもでないからな」

もう一度装甲を傷つける

今度はまた黒の装甲になった。

しかし……最初とは大きく違い、固定部位が殆ど存在しない

全ての部位が身体から離れ、そばに漂っていた

「そんなんじゃないやすぐリタイヤ、よっー!」

鈴が衝撃砲を撃つ。しかし……

「残念でした」

1st時よりも薄い装甲であるにも関わらず、同じか、それ以上の
防御力を持っていた

「なっ!?!」

「驚いてる暇なんてないんじゃない?」

すぐ後ろに接近して耳元で囁く彰

鈴は振り向きざまに衝撃砲を撃つが、盾で防がれる

(どうすればいい?こいつには勝てない……?あたしが?)

ズドオオオオンッ!!!

そこに大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

ステージ中央に、異形のISがいた。全身装甲、しかもマトリョシ
カ1st形態以上のものだ。

そしてそいつは、彰をロックしていた

「彰、逃げなさい」

「か弱きものを守る、ってのがウチの家訓でね」

勿論違つ。某ロボット+学園+女子の別番組の主人公の台詞だ。

一夏と比べてあの人は格好いい。ほぼハーレムだったけれど、一人の女性が好きだったし、なにより自分に正直に生きている。フェリーに乗れなかった。泳ごう、とか格好よすぎる。話題がそれてる

「あたしはか弱くないからいいのよ」

「・・・俺は盾だ。盾が、前衛職が真っ先に逃げ出したらパーティ戦闘も大規模戦闘も総崩れだ」

「なんの話？」

「ゲームだ」

だいたいオンラインゲームをやるとき、真っ先に職業を考える男、ソレが彰だ。

考えておきながら100%の確率で上位職が前衛になるものを選ぶのだが。

そして最初はパーティなど組まずに地道にレベルをあげるさらに理由は分からないが、何故か縛りでやってしまう。

レベルアップで手に入ったステータスポイントの割り振り方：所謂ステ振りだが、すべてVET、ディフェンス能力に振ってしまう序盤はまったくレベルがあがらず、武器頼りで生きているが、レベルが上がるにつれあちらこちらからパーティに誘われる。

そんな人間だからこそ、盾が向いていたのかもしれない

対人戦闘は苦手だが、今回の敵は人間が入っていないようだ。ならば喜んで盾となろう。

「ほら、俺の後ろから衝撃砲撃てよ」

「わかってるー」

「あぶなッ!!」

間一髪、鈴の前へ飛び出し、その盾で護りきる彰

(セシリアのビームより出力上、そして俺以上の装甲……)

「あんだ、何者？」

返事はなく、またもビームを撃たれる

キーンと鋭い音で弾き返す盾。

背の二枚の盾を鈴の元へ送る

「何やってんの!？」

「移動しながら撃てないだろ？盾の位置はこっちで操作するから気にするな」

鈴は移動し、衝撃砲を撃つが避けられる

このままでは鈴のエネルギーがなくなってしまう、か。

「鈴。俺のところへ来い」

鈴を呼び、アイツを俺の元へ連れてこい、とだけ伝え、準備をする
仕方、ないよな。

「彰…なんかするならさっさとっせよっせ」

鈴が大きく回転しながら、そいつを彰の元へ誘導する

彰は一度、ISを解除する。そして再度喚ぶ

最初の真っ黒なほとんど全身装甲のマトリョシカへと戻ったIS
で、敵の上へのしかかる

そして久しく喚んだことのない名を叫ぶ

「ベリエーチッ!!」

刹那、自分の身体にずしん、と衝撃がくる
重すぎる。

だが……

彰の下で潰されたISはもう動かなかった

彰の、マトリョシカの重みで回線が途切れたようだ。

「う……………?」

全身の痛みで目が覚め、辺りを見回す

「気がついたか」

「織斑……………先生」

「致命傷はないが、全身打撲だ。左手は骨折している」

「嘘でしょ」

左手が使えないと何もできない。布団に寝っ転がり、うつうつとしてきたあたりに叩き起こされた気分だ

「嘘をいって私に何の得がある」

「そうか……………先生、文字が書けません」

「誰かに手伝ってもらえ」

「じゃあ織斑先生がいいです」

「わたしは忙しい」

椅子に座っていた千冬は立ち上がり、腕を組む

存在感のある大きいおっp……………がぎゅみゅ、と押しつぶされてな
んとも言い難いエロさだ

「まあ精々頑張るといい」

そう言い残し、保健室から出ていく千冬。
入れ替わりに一夏、箒、鈴、セシリアが入ってきた

「気分はどうですか？彰」

「大丈夫か？」

「最悪だな。左手使えないって」

苦笑しながら言うと、鈴が手を挙げる

「ご飯ぐらいなら食べさせてあげてもいいわ」
「わ、わたくしもですわっ！」

・・・嘘、でしょう？神様。

どつちら俺は、モテ期がきたらしい

俺がモテるのはどう考えてもIS学園が悪い！完

嘘です

転校生が多いよね

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です」

山田先生が言うと、クラス内が一気にざわつく
情報が入ってきていないらしい。しかも二人という珍しさもある
というのに。

「失礼します」

「……」

クラスに入ってきた二人をみて、ざわめきがピタリと止む。

それはそつだ。だってそのうち一人が、男だったんだから。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣
れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の一人、シャルルがにこやかに笑ってそついうと、一礼する

「貴公子……」

「彰くんといい勝負ね」

「むしろ二人をくつつける……？」

「それだ」

クラスの後方で眼鏡をかけた女子生徒三人組がぼそぼそと話して
いる

それだっとなんだ。

人懐っこそうな顔、礼儀正しい立ち振る舞い、中性的な顔。髪は濃い金色、首の後ろで丁寧に束ねられている

彰のふわふわとあちらこちらへいつている髪の本束と違い、するりと抜けていきそうなそんな髪。

「男子！しかもウチのクラス！三人目とか！」

「神様ありがとう!!」

「美形・・・守ってあげたくなる・・・」

「彰くんがボディガードとかどう？」

「...それだ」

だからそれだってなんだ。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒そうに織斑先生がぼやく。山田先生がもう一人の転校生に自己紹介を促す

輝く銀髪を腰まで長くおろして、左目に黒い眼帯をつけている、赤い目の『軍人』

身長は、男としては小柄なシャルルよりもさらに小さい
そしてその少女は腕組みをして、周りに対し冷徹な視線を向けていた。

が、彰と目があつた瞬間、驚愕の表情へと変わった

「あ、きら・・・?」

「ラウラ・・・元気だった？」

全力の笑みでそう言うと、表情を怒りのそれにかえた転校生、ラウラはつかつかと彰に歩み寄り、彰の制服の胸元をぐい、と引つ張り顔を下げさせる

その体勢のまま小声で

「どうして私の前にいる。一度と会いたくないと言ったはずだ」

「むしろ俺の後を追ってこの学園に入ってきたんじゃないの？ラウ

ラ」

「ふざけるな。誰が……というか貴様IS使えたのか」

「ああ、俺の愛しのマトちゃんが優しく接してくれてるからね」

「お前というヤツはッ！」

マトリヨシカの愛称を言いつつ返事をする、突然ビンタされた

「……痛いじゃないか」

「何故かわさなかった」

「俺が叩かれる理由が見つからなかったから。フリという可能性を最後まで信じたただだよ」

ちなみにマトちゃんっていうのは、俺のIS、マトリヨシカの愛称ね、そう続けると、ラウラは溜息をついて……

織斑先生に叩かれた

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

織斑先生は溜息をついて先生と呼べ、とつぶやく

「ラウラ・ボーデウィットだ。その彰とは何も無い。以上」

「……ではHRを終わる。各人すぐに着替え第二グラウンドに集合。あと……織斑、彰。デュノアの面倒をみてやれ」

「はっ」

女子に囲まれているシャルルを救いだし、手をつかんで教室から出

る

歩きながら自己紹介をする

「俺は織斑一夏だ。よろしくな」

「よろしく、シャルル。俺は彰・シルルスキー」

「一夏くんは、彰くんね。よろしく」

にっこり笑って言うシャルル。

やはりどう考えても女子……

「ああっ！転校生発見！」

「男子3人よ！」

「いたっ！こっちよ！」

「織斑くんの黒髪、彰くんの白髪、おらに金髪……はうう」

「エメラルドの瞳！」

「しかもっ！彰くんと手繋いでる！」

シャルルが困惑顔で彰に訊ねる

「なんで皆騒いでるの？」

「……『男子』、だからだよ。珍しいんだよ？……キミは男、なんでっしょ？」

最後の一言を耳元で囁くと、納得したように頷くシャルル

「そうか。そうだね、ありがとう、彰くんっ」

「彰、でいいよ」

「じゃあ僕もシャルルで」

更衣室につき、着替え始める

時間があまりない。急げ

パーカーを脱ぎ、制服のボタンを外す
朝からISスーツを着ていたので、すぐに着替え終わった

「なあイチカ、着替えるの遅くないか？」

「そうか？引つかかるんだよ」

「……」

カーツと顔を赤くしたシャルル。

着替え終わるとすぐにグラウンドへ向かう

女子は殆ど来ていて、一組整列一番端に座る

女子のスーツとは違い、男子のそれは全身すっぽりと覆う形だ。

データを取るためらしい。水着と同じ形態だったら寒かっただろ
うな

「随分ゆっくりでしたね」

「ん、女子に捕まりかけたんだ」

「彰は女性との交流が多いですから？大変ですわね。今日も叩かれて
いましたし」

「なに？またやったの？」

背後から鈴の音がする

シャルルが困惑しているので、金髪ロールを手で示し、セシリアだ。
ツインテールを手で示し、鈴。と伝える

「また転校生の女子に叩かれたんですの」

「はあ？バカ？」

「いやああの子は違うんだよ」

「大丈夫だ。お前等三人も違う」

織斑先生の声が背後から聞こえ、振り向くと出席簿を振りかぶった鬼がいた

バシバシッ！ガッ！と音が響く

「いったあ……」

「先生、体罰はいけませんよ？」

「愛の鞭だ。IS展開はやめろ」

「叩かれたくないですから」

笑顔で答えると、青筋を浮かべた織斑先生の怒涛の出席簿ラッシュにあう

盾でどうにか捌いていると、蹴りも飛んでくる

「うわっ!？」

なんとか上体をそらしかわす。そのままバク転で後退し、向かい合う

「…。彰、死にたいか？」

「いつ?!いえっ!まったく!」

おとなしく地面に正座し、頭を垂れる

バシッ!と聞く分には心地よい音が響いた

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を始める」「はい…」

一、二組合同なのでまた人数が多い。

叩かれた頭をさすりながら座っていると、シャルルが心配そうな顔

で話しかけてきた

「大丈夫？」

「ああ、平気。ありがとう」

ぼむぼむ、とシャルルの頭を軽く撫でる。

「今日は戦闘を実演してもらつ。ちょうど活力溢れんばかりの餓鬼がいるしな。三人の内二人出てこい」

「俺パスします。頑張つて、セシリア、鈴」

「……………訂正する。鳳かオルコットでてこい。彰は強制だ」

「そんなんっ!？」

完全なとばっちりである。

「ではわたくしが」

「あたしがいくわ」

「わたくしです！」

「あたしが！」

「はあ……………今回はオルコットでいい」

二人のいがみ合いに呆れ果てた織斑先生はセシリアを選び、ISを展開させる

対戦相手は……………山田先生だ

「デュノア、説明しろ」

「は、はい！山田先生の使用されているISはー」

空中戦ではなく、空中対地上、のような感じだが、戦闘が始まった彰は特殊装甲の二枚をセシリアの元へ送り、セシリアの動きにあわ

せてソレを動かす

「ー知られています」

「ああ、そこまでいい。では彰のことを説明しろ」

「えっ？…はい。彰の使っている機体の名前はわかりません。しかし空中に浮遊していないところを見ると、かなりの重量だと思われる。あと、通常の盾持ちのE.S操縦者では絶対にできないような…味方に盾を送り込んでいます。そして味方の攻撃の邪魔にならないよう操縦しているので、彰はかなり強いと思われます」

急に説明しろ、といわれて対応できるシャルルはかなりすごいのだろっ。

織斑先生が手をぱんぱんと叩き、戦闘を終わらせる

「戦闘機持ちは織斑、鳳、オルコット、デュノア、ポーデヴィツヒ、彰だな。少しおおいな…誰か二人組になってくれ」

「はいっ！俺とシャルルで組みます」

「わかった。では出席番号順に一人ずつグループに入れ」

一分とかならずグループに分かれる女子。

「やった！よろしくねっ！織斑くん、デュノアくんっ！」

「うん、よろしく」

「わたしフリーです!!」

「うん？水泳の話？」

山田先生が打鉄とリヴァイヴどちらかを取りに来てください、と叫び、取りに行く

戻ってくると、シャルルが女子に囲まれて困り果てていた

「彼女は？」

ああ……どれもアウトだったよ……

「いいからさっさと進めろ」

「……はい」

鬼教師の目に留まり、怒られる

その後は若干雑談を挟みつつも、一番早く終わった

「では午前の実習はここまでだ。午後は訓練機の整備を行うので格納庫に集合すること」

一夏はすでに着替え終わって、更衣室にいた。

「早かったな」

「おう。飯早く食いたかったからな。今日は皆で屋上へ行こうぜ」

「いいね、それ。シャルルも連れて行っていい？」

「勿論」

「先行っててくれ。すぐに屋上へ向かう」

一夏を半ば追い出すようにして、更衣室の外へ出させる
扉が閉まると、彰はの方へ向き直った

「で、シャルルはなんで男装してんの？」

「やっぱり分かってたんだね。僕の父からの命令で、広告と、白式のデータを盗ってこい、って」

「……」

「僕愛人の子だから、使われてるんだよ。バレちゃったから、本国に戻されるんだらうけど」

「大丈夫。特記事項2-1には生徒はどの団体にも属さないってある。3年間は無事だ。その後も駄目だったら……俺がなんとかする」

「俺が何とかする、って……彰にはそんな力があるの？」

「ああ。俺は……彰・シルルスキーであり、彰・ディアギレフだから」

ディアギレフ。ロシアの現在の首相であり、3代続けて国を治めている国王でもある

その子、それが彰

全ての人に黙っていたが、かなり言いたくないことまで言ってくれたシャルルに敬意を示すため、言った

「流石に国相手には手出しできないだろ？」

「……ありがと、彰」

「いえいえ」

更衣室からでて、屋上へ向かう

そこに待っていたのは地獄のサンドウィッチということはまだ二人は知らない

シャルルはとっても優しい人

素敵に美味しそうな篤特製弁当を頼張る一夏の横で、彰は恐怖していた

目の前には、美しいサンドウィッチ。

しかし彰はこのサンドウィッチの美しさは幻影だと分かっている

「はい、ぜひ召し上がってください」

「……………あ、ああ……………」

断りたい。断りたいのだが。誰にでも好感の持てる男でいなくてはならない。

安価の呪いか、はたまたネットのお友達の羨望からくる怨みか。ええい、どうにでもなれ、という気持ちで一つを食べる

「あつ……………ああうん美味しいよ」

甘ーと絶叫しそうになるがどうにかこうにか抑える

すごく……………甘いです。見た目はスパイシーなんですが。

どうにかこうにかおかしくなりそうな頭を必死に保ち、一つを食べきる

その頃には、普段から色白の顔が蒼白になり、冷や汗だらだらだった

隣のシャルルが心配そうな顔で見つめてくる

「大丈夫？」

「あ、ああ……………ちょっと、体調が悪いみたいだ……………しょ、食欲もあんまなくてな……………ごめんセシリア」

「そんなんですの？大丈夫ですか？」

「保健室に行ってくるよ……………あと、失礼かもしれないけど一つ。

サンドウィッチにバニラエッセンスはいれない……」

ひとまず一番言いたかったことを伝えれた嬉しさで若干スキップしながら屋上から階下に降りていく彰

「彰、大丈夫かなあ……僕ちょっと見てくるね」

シャルルは席を立ち、彰を追う

「くっそ……甘すぎるだろアレ……舌しびれそうだし。あー、辛
いもん食べたかったか俺辛党だし……ふざけんなよアイツ」

「あ、きら……?」

廊下をぶつぶつ言いながら歩いていると、すぐ後ろから名前を呼ばれた

油切れのロボットのようにギ、ギギと首を動かすと、困惑顔のシャルルがいた

「……シャルル、どうしたの?」

「いや、大丈夫かなあって思って……今の声、彰だよな?」

まずい、聞かれてた。ああ、俺は安価にすら応えられないそんな屑な男なんだ……

「イヤ、ナンノコトカナ?」

「やっぱり彰なんだっ!」

「……………はい」

バレては仕方がない、とこれまでのことを全て話す

勿論俺がネット依存していた、とか重度のアニメ好き、とかDTのことはふせて、だ。

「へえ……そうなんだ。大変なんだね」

「3年間は無理って分かってたけど数ヶ月でバレるとはな……くそ、もうやだ」

「でも、今の彰でも、僕は全然いいよ？」

なんだ？と彰は疑問に思う

RPGで序盤に出てくるNPCみたいだ。ラストに近づいてきたら突如主人公の前にあらわれてずっと好きだった、と言ってくるような。最初から好感度MAXでどうしようもない系の。

「そう、か？」

「うん。あ、彰の秘密もうひとつ知っちゃったから、僕のも教えるねっ。実は、箸を使うの、すごい苦手なんだ」

「なんだそれ。可愛いなオイ」

頭を撫でると、可愛くないよー、とむくれるシャルル

なんだこの可愛い生物は。同じ人間か!?

「あれ？保健室ってそっちじゃないの？」

「もー寮に戻ろつかと思って。めんどくなっただ」

「そうなの？じゃあ僕もっ！」

「いいのか？」

「うーん……まあいいやー！」

寮の部屋を移動するようにかかれた紙が張ってあって、そこに移動すると、三人部屋だった

あきらかに男三人、だからということだろう。

「じーっ…ズットどろどろ…」

ぼふん、とベッドへ倒れ込み、枕を抱える

シャルルが電子端末を取り出すと、かけ始めた

「あ、織斑先生。デュノアです。彰が体調悪くなって、寮に帰っているんですけど…：…はい、一応は…：…それで、『独りじゃだあゝっ！』ってすがりついてきて…：…どうしたらいいですか？放置するのは可哀想で…：…はい、いいですか？…：…はい、ありがとうございます…す」

此方に向き直り、にこりと笑う

「僕もいていいって。よかったね、甘え上手な彰っ」

「なんで俺が言ったらしいセリフが大声なんだよ…：…」

「周りにいた女子に聞こえたらおもしろいかなあ、って」

溜息一つつき、布団に潜り込む彰

「しばらく寝るから、飯になったら起こして」

「うん。わかったよ」

かなり眠かったらしい彰は、目を閉じるとすぐに眠りについた。

シャルルはその寝顔を眺めていたが、ふと思ひ立ち、辛いモノを買いに行った

一方そのころ、一夏たちはというところ

「彰大丈夫かな？時間間に合わないわよね」

「相当体調悪かったんじゃ……」

集まった女子が一人いないことに気づき、ざわめき始める午後1時。

そこに電子音が響いた

「織斑だ……何？飯は食べたのか？…そうか」

『独りじゃやだあ〜っ！って、すがりついてきて…』

「何かトラウマがあるかもしれないな。いてやれ。ああ、じゃあ」

通話が終わる頃には、シャルルの言った『独りじゃやだあ〜っ！ってすがりついてきて…』がクラス中に広まっていた

「彰くんの意外な本性！」

「実は受け……!?!」

「萌えじゃないのー」

「……彰、ドドンマイ」

一夏は少し遠い目をして、友を思う

「んー……よく寝た」

「おはよう、彰。今4時ぐらいだよ」

「おー、さんきゅ」

起き上がり、伸びをして気づく

机の上にカラム チョがある

「あ、彰、これ食べる？さっき辛党って聞いたから」

「食べる！ありがと、シャル！……間違えた。シャルル」

「シャル、でいいよ。あと、入ってきていいよ」
「ん？」

シャルルが扉に向けて言うと扉がギィ、と開く
そこから見たのは銀髪。つまり……

「ラウラ。どしたの？」
「別に」

と言いながらも部屋に入ってくる
何というか猫を見ている気分だ

シャルルが彰の背後に回り、寝たことによってボサボサになった髪
に櫛を通す

「俺の見舞い？嬉しいなあ」

「断じて違う」

「わ、彰の髪ふわふわだ」

耳上の猫耳のようなハネを直そうとしているが、まったく直らない
戻ったかと思うとぴょん、とハネる
諦めて髪を束ね直す

「はい、完了」

「ありがとう。んじゃあ何しにきたの？」

「それは……」

彰、シャルルVSラウラ

「ええと、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

シャルルが転校してから5日後、土曜日の午後。

一夏はシャルルにIS戦闘のレクチャーを受けていた

レクチャー前はかなり爆音で戦闘をしていた二人の下で、彰は惰眠を貪っていた

ラウラのくどくどとした話を聞き流したシャルル転校初日。

鈴から散々聞きまわされ、自分で何を言っているか分からなくなつた火曜

箒に竹刀で叩かれている一夏を見ていた水曜

セシリアの昼食から逃げ回った木曜

シャワーを浴び終えてから、脱衣所に着替えを持ってきていなく、上半身裸で部屋に戻ると、たまたま落ちていたバナナの皮で滑り、一夏へダイブした瞬間に部屋の扉が開き、ホモ疑惑をかけられた上に織斑先生からのあつい説教で一日を終えた金曜

体力の限界は突破していた

「そ、そうなのか？一応分かっているつもりだったんだが………と
いつか彰よく寝るな……」

上空から見やると、床に横たわり寝ている彰が見える

勿論周りに女子の包囲網が完成していて、逆に起きない方が安全なのだが。

「うーん、疲れてるんだろうね。部屋で寝ればいいのに」

「まあいろいろあるんじゃないのか？」

そう。色々あるのだ。

ハーレムを作らせないとか。

ハーレムを作らせないとか。

……色々でもなかった事情だった

「一夏の『白式』って後付武装がないんだよね？」

「ああ。何回か調べてもらったんだけど、拡張領域が空いてないらしい。だから量子変換は無理だって言われた。零落白夜にとられてるんだと思う」

「白式は第一形態なのにアビリティーがあるっていうだけでもすごい異常事態だよ。前例はないし。しかも、初代『ブリュンヒルデ』が使ってたISと同じだよね」

と、彰がむくりと起き上がり、下から捕捉する

「零落白夜はエネルギーだったら何だろうと無効化・消滅させることができる。最大の攻撃能力だ。姉弟だろうと、一夏が使えるのは奇跡だと思う」

「よく知ってるなあ」

「……まあ、ね。俺も加わっていいか？」

二人の返事を待たずしてIS展開、中剣で装甲を二段階外す

「はい、一夏。一枚だけ使用許諾したから、盾使ってみよう」

「お、おう」

背中盾を一枚渡す

これで一夏は考えるだけで盾を扱えるようになる

「じゃあ、撃ってみよう」

「おっ……いやー」

シャルルがズババババ！と弾を一夏に向けて撃つ
1マガジン撃ち終えたところでやめる

「……盾って、難しいな」

白式の装甲は所々銃弾でできた傷跡ができていた

「うお、ドイツの第三だぞ」

ラウラがISを身に纏い、佇んでいた

「おい」

一夏に開放回線で話しかける

「……なんだよ」

「貴様も専用機持ちだそつだな。私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様になくても私にはある」

「また今度な」

彰に盾を返しながら言うと、ラウラはISを戦闘状態へシフトさせ、左肩の大型実弾砲が火を噴く

「！」

ガッ！

「こんな場所でいきなり戦闘とは、数年で戦闘狂になったのかい？ラ

ウラちゃん

「貴様・・・」

「ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね」

「フランスの第二世代型とクズが私の前に立ちただかるとはな」

「ドイツの第三世代型よりは動けるだろうからね」

「なんか俺馬鹿にされてたよな」

シャルルが武器を呼び出し、戦闘を開始する

今は土曜の5時。人が少ない時間帯は、模擬戦ならばしてもよいことになっている

「二人まとめてかかってこい」

「やったね、シャル。サポートするから」

「了解！」

一夏は地上まで戻り、下から戦闘の様子を見守る

圧巻だった

一枚すら操れなかった盾を4枚同時に操ると共に、二枚シャルルのもどで動いている

更に手の甲の盾もはずし、浮遊部位として利用している。

体周辺の浮遊部位をあたりに散らばらせ、若干の妨害を行っている・・・と思いきや、妨害ではなくサポートということに気づく

シャルルが撃った弾を反射させ、ラウラのもとへいくようにしている

彰はすごいが、シャルルもすごかった

瞬時に装備呼び出しを終え、次々と多彩な攻撃を仕掛けている

『その3人、やめなさい！』

「どうやら模擬の規定以上の戦闘をしてしまったらしく、担当教員からの放送がかかる」

『学年とクラス、名前を言いなさい』

「1 1、シャルル・デュノアです」

「1 1、彰です」

「……」

『もう一人は』

沈黙のままの姿勢を崩さないラウラ

「この子は1 1のラウラ・ぼーでなんとかかさんです」

「ぼーでなんとか!? 貴様、死にたいのか?」

ぐぐぐつと彰に近づき、ドスの利いた低い声で言う

しかしそのラウラに怯えた様子もない彰は更にからかう

「きゃー、らうたん近いよー? 何? ……キスでもしたいの?」

「死ね」

「嘘嘘! 冗談だって! ははっ、ラウラちゃんは手厳しいね!」

冷や汗を浮かべながら必死に取り繕う彰

ラウラは一度言ったことは最後まで貫き通す、有言実行な人だ
本当に殺されるかもしれないのだ。

「…チツ…」

ラウラが去ったところで、一夏に話しかける

「さて、俺の戦い方は見てた?」

「お前すごいんだな！・・・と、暗くなってきたな。帰るか」

寮までの帰り道、一夏は延々と彰のことを褒め称え、またも二人の関係についてのことで一部女子が大いに盛り上がったことを、二人は知らない

限界到来

「はー、風呂に入りてえ。」

「風呂なあ。俺も入りたいわ」

「ん？彰も風呂好き？」

シャルルがどこかへ消えたので、二人で着替えていると一夏が咳く。

彰「も」というか、彰も半分は日本人であるので風呂は好きだ。

大浴場が好きだ。露天風呂も捨てがたいが。勿論サウナ後の冷水も好きだ。

「まーな。全身あつたまるから好きかな」

「あの一、二人いますかー？」

と、ドア越しに山田先生が呼ぶ。

「はい？えーと、俺と彰がいます」

「入っても大丈夫ですかー？」

「ああいえ、大丈夫ですよ。着替え終わってますんで」

バシュッと心地いい音が響いてドアが開く。

「ええと、お一人からデュノア君に伝えてもらえるといいんですけど…
来週から男子は週二回、大浴場が使えるようになりました！」

「本当ですか!？」

一夏は嬉しい、助かる、だの言いながら山田先生に詰め寄る。

コイツは興奮すると周りが見えなくなるわ、朴念仁だわ大変だ。
間に入り肩を押さえる

「さーてイチカ、落ち着こうな」

「……何してるの？」

と、可愛らしい声が響く

今の状況を確認しよう。

山田先生の前に俺がいて、俺はイチカの肩を押さえていたのだが、それでもなお詰め寄ってきていたイチカのせいで半ば抱きついてい
るような……嘘だろ。

イチカははっと気づいたようでそそくさと離れる。

その動きが怪しさを引きずり出すことに気づきもせず。

「い、いや男子も大浴場を使えると聞いてな？」

「……ふうん。一夏は嬉しいことがあると抱きつくんだ？」

「シャル、ちが」

「彰も彰だよ！なんで普通に受け入れてるの？」

シャルルはプンスカ怒りながら寮へ走った。

何故怒っているのか自分でも分からないまま。

「ただいまー」

「眠い」

寮へ帰ると、彰は速攻でベッドにダイブする。

「じろじろと転がると、束ねた白髪もまわり、本当に猫のようだ。

「シャルルはー……シャワーか？」

疲れていたのか、一夏のそのセリフが聞こえなかったらしい。

聞こえていたら止めに入ったというのに。

一夏は戸棚の予備のボディソープを取り出すと、シャワールームの扉を開けた。

ガチャ、と一夏が開けた音ではない音がした

「ああ、ちょうどよかった。これ、替えのー」

「い、い、いち……か……?」

「へ……?」

「……あ? シャルは?」

彰、時は遅し。

ガバリと起き上がってシャワールームを見やる

磨り硝子の向こうで黒髪と金髪が見えた。

「……嘘、……」

どんな男だって、異性の裸をみればその人が気になり出す。

そして標準以上の顔つきの男に裸をみられた女性はそいつを意識しだすだろう。

思った通り一夏は顔を真っ赤にして出てきた

「ああああ彰あのな!!」

言おうとしたようだったが、『このこと彰は知らないのでは?』と思
い立ったらしく言うのをやめる

ガチャ、と控え目に脱衣所のドアが開き、『女子』のシャルルがでてくる

二人にばれたからか、胸をなくすようなコルセットはつけていないようで、輪郭だけで女子と分かる。

彰の隣でガッチガチに固まっている一夏を横目に、彰はシャルに語りかける

「バレちゃったなー」

「う、うん」

ざっくりと自分の状況を一夏に説明し終えたシャルはこう締めくくった

「でもね、何かあっても彰が何とかしてくれるって言ったから……。とりあえず、卒業までよろしく、ね？」

その頃には一夏もリラックスし始め、話は終わった

「……で、彰は何で知っていたんだ？」

「普通見て分からないか？あと、匂いとか、所作で」

声も高校生男子にしては高すぎるし、ほんのりと女性らしい甘い匂いがする。

「匂いって……彰、もしかして変態なのか？」

「えっ」

青ざめた彰を見て、シャルルはクスクスと笑う

「ボクは本当にいい友達をもった気がする。ありがとう」

と、突然廊下が騒がしくなる。

ドタドタ、バン！ガチャリ！ドタドタ、バン！ガチャリ！と廊下を

走って扉を開けて、閉めてまた走り出す音。

「『『』』」

その音はどんどん近づいていて…とうとう、扉を開けられた

「兄者ッ!!」

入ってきたのは…白髪を肩ほどまでのばし、赤い眼をきらきらと光かがやせた、少女のように可愛らしい、少年。
彰に飛びつくと、頬ずりをし出す

「…なんで…?」

「兄者に会いにきたでいじわるっ…」

「…はい、帰ろうな…」

と、首根っこをひつつかみ、廊下へ放り出そうとした彰を一夏とシャルルは止める。全力で阻止する

「まあまあ話ぐらいは聞いじつぜ…」

「そっだよそっだよ…」

「俺に用はないし、コイツも用なんてないだろ」

「兄者の友さまは優しいでいじわるなあ…」

ため息をついた彰は、少年を離れた。